

「望む性」を生きる自己の語られ方 —— ある性同一性障害者の場合

湧井幸子 京都大学大学院教育学研究科
Sachiko Wakui Graduate School of Education, Kyoto University

要約

本研究では、女性から男性へ性転換することを希望する性同一性障害者当事者1名（以下、ハル）の語りを用いて、当事者が人生の中で行う意味づけを捉え、「性同一性障害当事者」になっていくプロセスを追うことを目的とした。自己物語の視点から当事者の経験の意味づけを捉え、分析を行った。ハルの物語は、ハルによって自発的にカミングアウト行為の前後で分けられていた。さらに、「研究の場」における対話プロセスの中にはカミングアウト前後の語りを媒体する「移行の物語」が存在した。カミングアウト前のハルの自己物語は性をめぐって変遷し、物語が作られる前後には3つの転機が存在し、さらにダブルベルソナという心理的構造が見出せた。移行の物語では、「私は病気である」という自己物語が3つの文脈で語られ、ハルがカミングアウトを選択するのに大きな影響を与えていた。また、カミングアウトに関する語りにおいては、時間的展望・自己の時間的一貫性が生成され、他者との共生可能性を生み出す機能がみられた。カミングアウト後におけるハルの自己物語は、1期から7期までに分けられた。ハルと他者の間には、次元1：男-女、次元2：性同一性障害当事者-非当事者という2つの次元でズレが発生していた。

キーワード

性同一性障害、自己物語、病い、意味、プロセス

Title

The Narrative of Self in Opposition to One's Sex: the Case of a Person with "Gender Identity Disorder".

Abstract

The subject of this paper, "Haru" desired to change gender from female to male. Using data obtained mainly through interviews with Haru, this paper examined how Haru, a person with GID, learned to live with GID and also relates his personal account of GID. This data was then analyzed from the self-narrative perspective. Haru chose to divide his narrative into two parts: pre coming-out and post coming-out. In addition, a "transition" story was identified in the dialogue process, linking the two parts of the story. Haru's self-narrative, pre coming-out, shifted back & forth in terms of his understanding of his sexuality. The transition story contained a self-narrative by which Haru explained that he had a disorder. He expressed his disorder as it related to several contexts: personal, social and medical. Post coming-out, Haru's self-narrative was divided into seven phases.

Key words

gender identity disorder, self-narrative, disease, meaning, process

1 問題

1-1 性同一性障害をめぐる状況

性同一性障害 (gender identity disorder, GID) をめぐる医学的、社会的状況はここ数年で大きく変化している。1998年に初めて公式の性別適合手術¹⁾が行われて以来、埼玉医科大学および岡山大学で行われた手術例はあわせて40例を超え、主要医療機関の受診者も合計で2000名を超えた(針間, 2003)。また、2003年7月に「性同一性障害者の性別の取扱いの特例に関する法律」が公布、2004年7月より施行され、GID当事者が戸籍上の性別を訂正することが可能となった²⁾。

GIDは、身体的な性別 (sex) と心理的な性別 (gender identity) が合致せず、そのことに苦悩している状態である。米国精神医学会の作成したDSM-IVの診断基準を満たすとき、GIDと診断される。

GIDに関する研究は、法律学、医学、脳科学領域で盛んになされている。法律学領域では、戸籍訂正に関する問題(大島, 2001a)、性別表記(大島, 2002)、婚姻(大島, 2002)、拘置・刑務所での処遇(大島, 2001b)と多岐にわたり、少数者の人権をいかに守るかということについて活発な議論がなされている。医学領域では、診断(Devor, 1994; Pauly, 1993)や治療方法(Chaloner, 1991)、治療経過(Hunt & Hampson, 1980)、精神衛生(Jones & Hill, 2002)に関する多くの研究が行われている。脳科学分野からは、GIDや同性愛者になるかどうかは胎児期に決まるといった報告がなされて(貴邑, 2003)、GID理解の広がりはいままで疑問をもたれなかった男性と女性の違いを見直すきっかけにもなっている。また、社会学的研究では、杉浦(2001)がGIDをめぐる医学的言説を分析し、医療機関におけるGID診断場面への影響を検討している。

これらの研究は、著しく進展するGIDの治療の動きに対応すべく当事者の生活を擁護するための外的枠組みの補充や改変、反省がなされているものの、当事者の内的な心理世界やプロセスにはほとんど触れられ

ていない。そこで、本稿では、以下の3つの点に着目しながら研究をすすめていく。

1-2 目的

1点目として、「GID当事者」になっていくプロセスを追うことを目的とする。プロセスとは、GID当事者が自らGIDであることを認知し(以下、GID認知)、他者にカミングアウト(以下、Coming-outを略しCOと記す)することを決意、表明し、その後、他者と共生していく生き様そのものである³⁾。先に見た医療、法律分野の研究では「GID当事者」という実体が「患者」なり「法律の保護にある存在」として自明視されている。本稿ではそのような視座は取らず、個人がいかなるプロセスの中で「GID当事者」になっていくのか捉える。

したがって、2点目に、個人の特殊性・主観・意味・解釈を重視し、人間の内的世界を解明する方法を選択する。GID当事者の内的世界を内側の視点からみることは、臨床的援助を必要としている当事者を理解する一助にもなるだろう。瀬山(1998)によれば、マイノリティと呼ばれる人々は、その属性に付与された否定的な意味ゆえに「自分が何者であるのか」「何者であり得るのか」を常に問うことを要請されてきた人々である。なぜなら、差別は人から価値あるアイデンティティを剥奪することにおいて成り立っているからである(石川, 1996)。

3点目として、GID当事者の心理構造の抽出を目指した。やまだ(1997)は「モデル構成的現場心理学」を提起し、それを『『モデル構成』のために、研究の場『現場』で研究する心理学』と定義する。西條(2003)は、モデル構成的現場心理学の意義を3つに集約している。その中で、モデル構成的現場心理学がモデル構成を方法論の中核に据えた点について、(1)曖昧な記述に終始しかねない質的研究に「モデル」という検討可能な実体を与え、(2)個性記述で終わらねない質的研究を、モデルに基づき一般化を目指すものとして位置づけることが可能になったとしている。本稿は、やまだ(1997)や西條(2003)の志向性を共有するものである。

以上3点を踏まえ、本稿ではGID当事者1名に縦

断的なインタビューを行い、GID 当事者が人生の中で行う意味づけを捉え、「GID 当事者」になっていくプロセスを追うことを目的とした。記述に際しては「構造化に至る軌跡」を明記し、構造の抽出を行い、予測可能性、再現可能性、反証可能性、客観深化可能性といった広義の科学性（西條，2003）を確保することに努めた。

1-3 自己に関する検討：自己物語論

本稿では、自己物語の視点から、GID 当事者の経験の意味づけを捉えた。ガーゲン（Gergen, 1994）やガーゲンら（Gergen et al., 1983）は、自己物語を「自己に関するさまざまな出来事との関係について、個人が時系列に沿って説明を与えること」と定義する。この概念の前提になっている考えは、第一に個人は「自分が何者であるか（＝自分が何者ではないか）」という問いを通じて、自ら自己自身を形成・再形成しているのであり、第二に、個人のある時点での自己認識は時間の流れの中で過去の出来事との関連においてなされているという理解である。野口（2002）によれば、自己は「自己語り」によって更新され、自己を語ることは自己物語を改訂し、更新していくことである。アンダーソンとグーリシャン（Anderson & Goolishian, 1992）は、他者との会話によって育まれる物語的アイデンティティのなかで、そして、それを通して人は生きることができるという。他者とともに物語として再構成した現実とは、個人の経験に意味とまとまりを与えるようになるのである。その意味で、自己はまさに物語の産物である（Bruner, 1990/1999）。

フランク（Frank, 1995/2002）は、病いの経験がいかに「物語」「語り」を必要とするのかを論じている。この場合、病い（illness）は疾患（disease）という言葉と対比的に用いられる。病いとは、病気の生物学的側面である疾患とは異なり、病む者が病気に対して付与する意味や経験といった病気の個人的側面をあらわす。クラインマン（Kleinman, 1988/1996）は、病いのもつ 4 つの意味を区別している。第 1 の意味は、「症状自体の表面的な意味」、第 2 に「文化的に際立った特徴を持つ意味」、第 3 に「個人的経験に基づく意味」、第 4 に「病いを説明しようとして生ずる意味」として

いる。第 1 の意味と第 2 の意味が「与えられる意味」であるのに対し、第 3 と第 4 の意味は「創り出される意味」である（野口，2002）。つまり病いの意味は与えられると同時に自己によって主体的に創り出されるものであり、そこで生み出されるものが自己物語であるといえる。

ここで病いの研究を参考にすることは、GID を病いとしてのみ捉えることを意味しない。病いに関する研究分野では、自己物語を枠組みとした研究が豊富に蓄積されつつあるが、すべてが GID 当事者研究に有効なわけではない。筆者は、病い研究の系譜をつぐ自己物語研究のあり方をさらに拡張して進化させることが当事者理解を深めるものと考え。それは、物語の「語られたもの」の形式や構造に重点を置くだけでなく、自他に向けて「語る」行為について具体的な文脈に即して理解することを意味する。語り手が物語を「語る」ときの「語る」行為の意図・無意図性は自己物語における主体の問題と絡み合い、分析する研究者の主体性にも関連する。1-4 では、この点を検討する。

1-4 自己物語における主体は誰か

自己物語とは「語り手から語られたもの」を示し、当然語り手がその自己物語における主体者となると思われる。しかし、語り手はたんなる情報提供者ではない。桜井（2002）は、語り手とインタビューアの「共同作品としての語り」の重要性を強調する。桜井（2002）によれば、インタビューで得られた語りとは、必ずしも語り手があらかじめ保持していたものとして、「インタビューの場」に持ち出されたものではない。それは、語り手と研究者の相互行為を通して構築されるものであるとしてインタビューの場を重視している。筆者はその概念をさらに拡張し、語りの相互生成の時間空間として「研究の場」を挙げたい。研究の場とは、分析や論文記述をも含む研究活動そのものである。筆者は研究の場を「インタビューの場をも包括しながら、広く語りが生産される場」と考える。なぜなら、研究活動とは厳密に言えば研究者一人の作業ではありえず、語り手と研究者の長期にわたる対話プロセスだからである。インタビューを終え「生身」の語り手が目の前

におらず、逐語記録のデータがそこにあるだけだったとしても、である。研究の場では、時に沈黙あり、抵抗あり、醸成期間あり、それでも辛抱強く語り手の声や存在そのものと対話を重ね、互いに音色を響かせる創造的作業が行われていると考えられる。

インタビューの場では、語り手が明示的に「ことば」にして語らなかった（語れなかった）ものが、研究の場において「ことば」となって物語られてくることがある。このとき、研究者から語り手への関与は明らかであるが、研究者は語りの脚本家でも代弁者でもないということに注意せねばならない。

論文記述に当たっては、以下の2点に留意した。第1は、語り手と研究者が共同で「ことば」に紡ぎなおしていくプロセスを記述した。第2に、語り手によってその物語が「ことば」として語られなかった理由の可能性を模索した（4-1参照）。

2 方法

2-1 インタビューエントリー

GID 当事者のハル（仮名）と筆者の関係は、湧井（2002）のインタビュアー／インタビューイとして始まる（2001年5月）。当初、性に関する問題は語られなかったが、インタビューを重ねるうち、ハルは自分がGIDであることを筆者にCOした（2001年11月）。その後、筆者よりGIDに関する研究協力を再度申し出（2003年1月）、本研究参加に至った。

2-2 分析に活用するデータ

主なデータは3回のインタビューから得た。

また、Eメールでの筆者とのやりとりもデータとして扱った（2002年11月～2003年11月）。これらのデータは、ハルによる確認と同意を得た後、分析データとして取り扱われた。

2-3 ハルの紹介

女性から男性へと性別を移行することを希望している。2001年に某大学病院よりGIDと正式に診断された後、性別適合手術に向けて治療継続中である。本研究参加時、22歳であった。

ハルによれば、保育園時は活発な少女であったという。髪はいつも短く、スカートをはいた記憶はない。ハルは小学校、中学校とそのほとんどを不登校状態で過ごした。学校に通う代わりに、障害児学級やフリースペースに通い、男の子と一緒にキックベースや野球をして過ごしてきたという。14歳の時、ハルは突然自宅に帰ることができなくなり、深夜徘徊がはじまった。自殺願望を持ち、我が身を投げるビルを探してはその屋上に上るといった行動が4ヶ月ほど続いた。カウンセラーの判断により、ハルは精神科に入院する。7ヶ月間の入院生活のあと、ハルは「自分では全然分からないけど、なんか家に帰れるようになった」。

18歳で定時制高校に入学し、さらに20歳から専門学校に通い、両学校とも22歳で卒業する。20歳の時、自らがGIDであることを認識し、それ以降、他者にCOしはじめる。専門学校で学んだことを生かし、忙しくも充実した毎日を送っているという。

以上の内容は、個人の匿名性を保持するために一部改変されている。

2-4 分析方法

ハルは、自らの人生をCO前／CO後に分けて表現する。まず、ハルの区分に倣って、CO前を「プレCO期」、CO後を「ポストCO期」として分析を行った（分析1・分析2）。つぎに、なぜハルがGID認知後にCOを選択したのか、その問いに対するひとつの答えとしてプレCO期とポストCO期の間のギャップを媒介する物語があることを仮定し、移行の物語と位置づけた（分析3）。本稿では、ハルの人生時間軸に沿って分析1（結果と考察1）→分析3（結果と考察2）→分析2（結果と考察3）という順序で記述する。さらに最後に総括的討論を行う。

なお、「」はハルの語りの引用であり、「」内の

表1 本研究におけるインタビューの概略

	第1回	第2回	第3回
実施日	2003年3月	2003年5月	2003年9月
面接法	半構造化面接	半構造化面接	COに焦点を当てた面接
面接者	筆者	筆者	筆者
被面接者	ハル	ハル	ハル
同席者			リン(ハルの恋人, 女性)

括弧は筆者による補足説明である。

分析1：プレCO期

データからプレCO期に関する語りを抽出し、73個の意味的なまとまりを構成した。それらをKJ法に準拠して、21個のカテゴリにまとめあげ、カテゴリ間の関係性を考察した。

分析2：ポストCO期

データからポストCO期に関する語りを抽出し、ハルと他者との間で繰り広げられた出来事を中心に、時間軸に沿って分析を行った。その中で、他者との間で生成されたハルの自己物語について検討した。

分析3：移行の物語

「COを選択しない生きかたもある一方で、なぜハルはCOを選択したのか」という問いを立て、データ全体を分析対象とした。プレCO期、ポストCO期に関わらず見受けられた「私は病気である」という語りに着目し、それらがいかなる文脈で使用されているかを分析した。

2-5 本稿におけるトライアンギュレーション

本稿における分析対象は、ハル一事例であるが、GID自助グループやGID研究会に参加し、他のGID当事者に話を聞く機会を積極的に持った。本稿では、そこで得られた知見も補足的に使用する。

3 結果と考察1 プレCO期

3-1 GID認知するまでの自己物語

まず、KJ法から得られたプレCO期のカテゴリと各カテゴリ間の関係を見ていこう。結果と考察1、および図1における全てのカテゴリはKJ法によって得られたものであり、『』は自己物語を示す。等号(=)はカテゴリ同士が同等であること、単方向の矢印(→)はあるカテゴリとカテゴリの関連、両方向の矢印(↔)はカテゴリ間の関係が相容れないことを示す。

プレCO期におけるハルの自己物語は、性をめぐって変遷し、そこには自己の根底を揺さぶる3つの転機が存在していた。

転機1：第2次性徴による身体的変化

ハルは、転機1がおとずれるまで『男でも女でもない自分』という物語で安定していたが、〈第2次性徴による身体的変化〉はハルが女性である決定的な証拠となった。転機1以前は、〈女の子が好きである〉ことは「世間一般ではおかしいことみたいだ、と思っていました。でも、ぼくにとっては自然なこと」として受け止められていたが、転機1以降、ハルは〈女の子が好きである〉という自らの性指向を「同性愛指向」と受け止め、自らを『同性愛者(男役)』と捉えるようになる。ここでの『同性愛者』は、女性が女性を愛する「レズビアン」を意味する。また、男役とは〈男として扱われたい、男になりたい〉という願望であり、

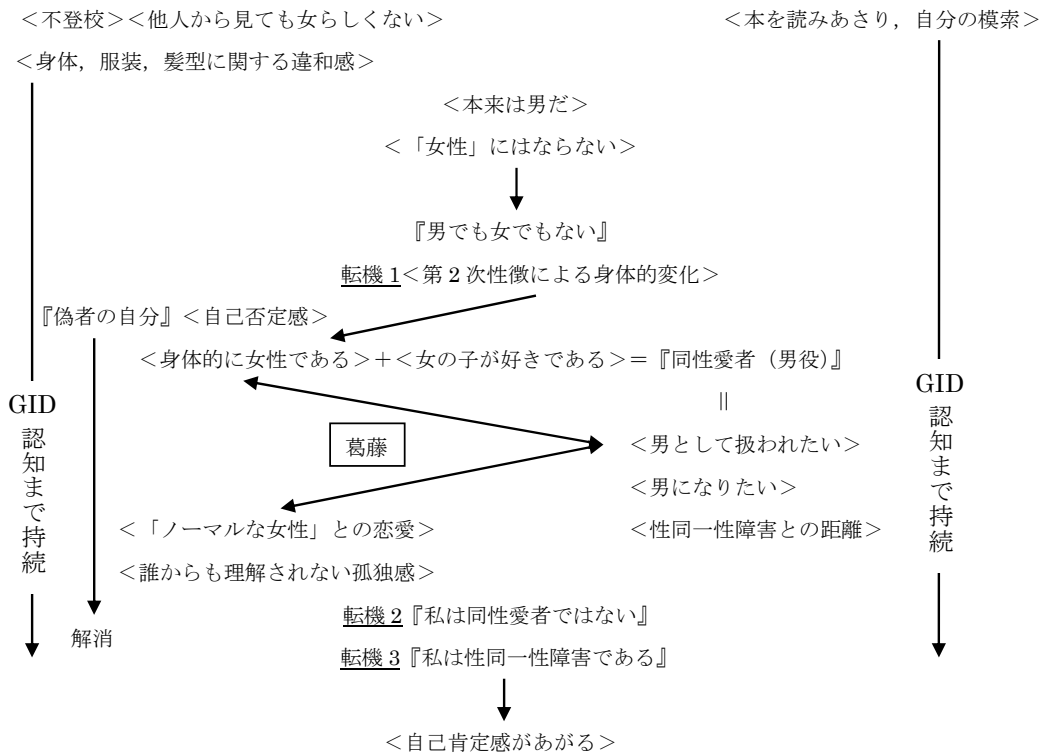


図1 プレCO期におけるカテゴリー関係図

ハルの物語内で独自の意味体系を有している。以下、『同性愛者』とある場合には、常に男役を指すものとする。

ハルは20歳まで『同性愛者』として生きてきたが、『同性愛者』であることをCOすることはほとんどなかった。ハルは、当時の自分を『偽者の自分』と表現する。「自分は、女である、同性愛であるっていうことは女であるってことを受け入れなきゃいけないんだけどさ、その一方で男になりたいって思ってる自分も認識してて。まあ、それは同性愛の男役なんだろうと思ってたからアイデンティティはあったけど。その一方でさ、でも今の性に満足していない自分ってのはずっといたわけじゃない？ 嫌だ嫌だ嫌だって思ってる」という語りは、『同性愛者』物語におけるハ

ルの葛藤を示している。『同性愛者』物語は、女性としてのアイデンティティをハルに与えるという意味で、ある種の安堵感をハルにもたらす一方で、「レズビアン」であることから免れられない。また、性別(sex)の概念では、ハルは男役を演じる女性にとどまらず、本当は男性になりたい自分を認識し、葛藤が生じている。

転機1に引き続くカテゴリ：「ノーマルな女性」との恋愛

『同性愛者』のハルは、ある「ノーマルな女性」と恋愛関係を持った。ハルは、その女性がハルを女性として捉え、女性として扱うことに耐えられず、関係が破綻する。他者から女扱いされたときの嫌悪感は、ハ

ルの〈男として扱われたい、男になりたい〉願望を強め、結果的に GID 認知につながる「貴重な体験」として語られていた。

GID 認知まで持続していたカテゴリ：身体・服装・髪型に対する違和感／他者から見てもらしくくない／本を読みあさり、自分の模索

〈身体・服装・髪型に対する違和感〉では、特に身体に対する違和感が強調して語られた。「自分の体が嫌、というより変なんです。ありえないんです、自分の中で。いわゆる女性といわれる体型になってからもう 10 年くらいたちますが、未だ慣れません。切羽詰った問題」であるという。ハルは、性別適合手術をすれば、身体の違和感はほぼ消失すると予測する。

〈他者から見てもらしくくない〉の例では、コンビニの店員から「男性に間違えられて、うれしいんだけど、反面怒らなきゃいけないような気になってきて否定をしたり」、フリースペースの先生が「新しい不登校の子がくると、こいつ（ハル）女だと思おう？ 男だと思おう？」というネタを使って、周囲の場を和ませようとしていた例が語られた。転機 1 以降、他者の疑いに満ちたまなざしは、ハルに〈誰からも理解されない孤独感〉や継続した〈自己否定感〉をもたらしている。転機 1 以前では、〈本来は男だった〉〈女性にはならない〉自分として生きていたため、他者の疑いのまなざしと自己物語が一致していたのである。孤独感にさいなまれてどうしようもなくなると、ハルは「まりも」のようにうずくまるポーズで「ふっ、人間なんか信じてねーよ」と思いながら、精神的、身体的に自分を守る手段や格好をとっていたという。それは、長い時は数ヶ月持続するものであった。

〈本を読みあさり、自分の模索〉とは、プレ CO 期におけるハルの自己模索手段であり、性に関連する本を読みあさるという行動である。本を読んで取り入れた知識で、新たな自己物語を生成したり、既存の自己物語を強化したりする機能がみられた。その一方で、本の中の GID 当事者の強烈な体験（性転換願望や実際の手術の話）は、〈GID との距離〉を生みだしている。ハルにとってそれらの話は「恐怖でしかなく、そこまですることに何の意味があるのだろうか？」とも思っていたのである。

転機 2：『私は同性愛者ではない』

ハルは、レズビアンカップルを描写した映画を見て「レズビアンとは女性が女性として女性を愛している」ことに気付き、「ああ、これはぼくとは違う」と思ったという。ハルにとって『私は同性愛者ではない』という気付きは、「（その映画の）DVD を購入して我が家に保管」するほど重大であった。

転機 3：『私は GID である』

転機 2 の直後、「じゃあ自分って何？」という新たな問いと向き合うことになったハルは、性に関する本を読み続けた。そこで、以前読んだ本とは別の GID 当事者（平安名ら、2000）の手記に出会い、「それが実にスムーズに受け入れられた、というのか、そうそう、そんな感じという感じ。それって性同一性障害って言うていいの？ これが性同一性障害だったの？」として、GID 認知に至っていた。「自分は男になりたいというより、それでいいんだ（男になりたいと思う自分はおかしくない）っていうのが分かったから、多分すごくそこは楽になった」という語りには、『私は GID である』物語によってありのままの自己を認められるようになったハルの姿がある。

3-2 プレ CO 期の考察：ダブルペルソナ概念の提起

プレ CO 期における自己物語は、時間軸上で 3 つに区切られた（転機 1 以前／転機 1 以降／転機 2・3 以降）。考察では、それぞれの時期において、ハルが物語を語るときの意図・無意図性について具体的な文脈に即して検討する。

まず、転機 1 以前の『本来は男だ』『女性にはならない』『男でも女でもない』という自己物語は、ハルにとって自己説明力・自己確信度ともに高い物語として、自分と他者の双方向に自然に語られていた。周囲の他者もハルを「女らしくない女の子」として見ており、この時点で両者の認識は一致している。転機 1 以前では、〈女の子が好きである〉ことが他者に積極的に語られ、ハルが悩んでいる様子は見受けられない。

次に、転機 1 以降～転機 2・3 以前においては、転機 1：〈第 2 次性徴による身体的変化〉によって〈身

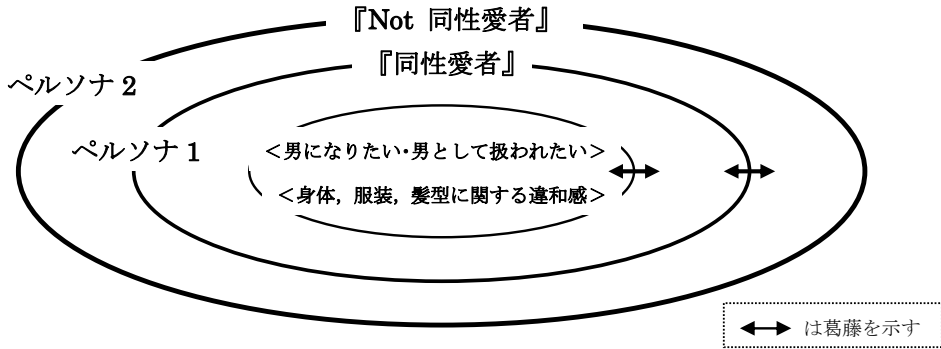


図2 ダブルペルソナ

体的に女性である)ことが、自他に露見する。〈身体的に女性である) ことに加えて〈女の子が好きである)という論理は、ハルに『同性愛者』物語をつくらせた。この論理は、ハルを『同性愛者』物語に縛り付け、容易に物語転換できないペルソナとして機能している (=ペルソナ 1)。ここでのペルソナとは、自己にべったりと張り付いて離れない仮面という意味合いを持っている。ペルソナ 1 である『同性愛者』物語は、他者には隠されるべきものであり、ハルにスティグマ (Goffman, 1963/1970) を押すものであった。スティグマとは、他者や社会集団によって個人に押し付けられた負の表象・烙印のことであり、ネガティブな意味を持つ。

また、「ノーマルな女性」というハルの表現は、一方にノーマルではない自分の存在を示唆している。そこで、ハルはノーマルを装うためにもうひとつのペルソナ (=ペルソナ 2) を必要とする。ペルソナ 2 とは『自分は同性愛者ではなく、ノーマルである (=Not 『同性愛者』自己物語)』ことを、他者および自己に向けて被るものである。

本来の顔にペルソナ 1 がべったりと張り付き、さらにペルソナ 2 をかぶっているハルの状態をダブルペルソナ状態と仮定する。ハルは GID 認知までダブルペルソナ状態であったと思われるが、ハルはそのような自分を『偽者の自分』と表現し、「こんな自分を消してしまいたい」と自殺未遂を続けた。

では、ハルの本来の顔とは何だろうか? 『同性愛

者』物語は、ハルに「アイデンティティがある」安堵感をもたらすものの、それは『偽者の自分』でしかない。この 2 つの物語の狭間には、〈男として扱われたい、男になりたい〉という身体の内から湧き上がる確かな願望と〈身体、服装・髪型に関する違和感〉が存在し、ペルソナ 1 と「本来の顔」の間にわずかな隙間を生じさせている。しかし、ハルはそれらを明確に言語化できず、ペルソナと顔を分断させるほどの隙間にはなりえていない。このとき「本来の顔」はハルに認識されず、存在するのはペルソナ 1 に対する「嫌だ嫌だ嫌だ」という感情と『偽者の自分』だけである。

転機 2・3 以降で、ハルは『私は同性愛者ではない』ことに気付いた後に、『私は GID である』という認識に至ったが、それによってダブルペルソナ状態が解体したといえよう。『私は GID である』物語においては、〈女の子が好きである)ことが、ハルにとって「異性愛というマジョリティ」の証明となり、ペルソナ 1 である『同性愛者』物語が消失するのである。ペルソナ 1 が消失すると、ペルソナ 1 を隠蔽するために機能していたペルソナ 2 は不要になり消失する。物語の狭間に存在していた〈男として扱われたい、男になりたい〉願望や〈身体、服装、髪型に関する違和感〉は、今や『私は GID である』ことの根拠として言語化され語られていく。本来の顔を取り戻したハルは、自己肯定感を取り戻し、他者に語ることのできる自己物語として、GID であることを CO しはじめる。

4 結果と考察 2 移行の物語

4-1 プレCO期とポストCO期をつなぐ「移行の物語」

ここでは、プレCO期とポストCO期を媒体していると思われる「移行の物語」について明らかにしていく。移行の物語は、ハルから自発的に語られたプレCO期・ポストCO期とは異なり、「研究の場」（「1問題」参照）で紡ぎだされた物語である。以下、1-4で述べた留意すべき2点について説明する。

まず、ハルと筆者が共に「ことば」に紡ぎなおしていくプロセスを記述する。筆者は分析当初、ハル自身が語ったプレCO期・ポストCO期の区分に沿って分析を行った。しかし分析が進むにつれ、そもそもなぜハルの物語がCO行為の前後で明確に分けて語られるのかという問いを持つようになった。その問いに対して「切り離された語りと語りの間に、それらをつなぐ移行の物語があるのではないか？」という仮説（筆者の物語）が生成された。そこで分析3やCOに焦点を当てたインタビュー（第3回）を行うことで、ハルとの間で移行の物語を共有し、擦り合わせる作業を行った。それはまさに共同生成・創造的プロセスであるといえよう。

2点目に、ハルにとって移行の物語が「ことばとしての語り」になりえなかった理由の可能性を模索する。なぜなら、ハルが「ことば」として語りえなかったことそれ自体に何らかの意味があると思われるからである。ハルの語りは、CO前後で2つに分けられていることに特徴があるが、これにはGIDという病い自体が関与している可能性がある。プレCO期の語りは、語り口調、内容ともにほとんど変化がなく、語りが安定している一方、ポストCO期の語りは、語り口調に高低があり、怒りや安堵といった情緒の揺れも見られた。ポストCO期についての内容は「今、どうすべきか」など、現在ハルが抱えている悩みが多く語られ、その時々ハルの状況によって、内容が異なっていた。プレCO期は、ハルにとって過去の個人の物語として捉えられ処理されている一方、ポストCO期は、現在進行中の物語であり、個人内にとどまらず対人関係に

おいても日々の現実の変化にさらされ、結末を迎えていない。

ここに、人生を2つに分けて語ることによって、性転換しようとする自分自身の生き方について整理し、同様に他者に自分の物語を納得してもらいやすいというメリットがある可能性がある。GID当事者は、服装の次元にせよ、ジェンダーの次元にせよ、身体の次元にせよ、性を転換しようとする意思を持つ。ハルは中でも身体的な性別を転換することを望むが、それは性転換の程度としては最も大きいといえるだろう。推測に過ぎないが、性転換しようとすることは、否応なく当事者の人生をGID認知（性転換を決意した）前後で切り分けるのではないだろうか。切り離して語ることで、当事者の人生が安定する可能性がある。つまり、当事者は、人生を分けて語ることで、GID認知後の人生を新たにし、新たな第一歩を踏もうとするのである。

しかし、ハルはインタビューで「過去を隠そうとか、女であったことを一切分からんようにしようという発想はない」「女の身体を持っていたっていうことはすごく面白いっていうか、重要なカテゴリ」と語る。これらの語りは、転換前後の語りと語りの間をつなぐ鍵と考えられ、当事者の人生全体の物語理解をより一層深められると思われる。

4-2 プロセスとしてのCO

COとは、自分に関するある事柄について他者に打ち明けることで、英語の“Coming out of the closet（押し入れの中から外に出る）”という比喩表現に由来する。COと語りの関連では、「ストーリー（ズ）の社会学」を提唱したプラマーが有名である（Plummer, 1995/1998）。プラマーは、ストーリーに関する研究が、物語の構造や形式的な構造を分析するものに偏りすぎてきたことを批判し、ストーリーの社会的役割を調べることに関心をよせるべきだとする。

本稿ではさらに踏み込んで、つなぎ・移行・プロセスとしてCOを捉える。COは、個人の生き方や他者との関係のもち方そのものであり、そもそもCOだけを切り取って分析することが不可能と考えるためである。まず、ハルが自他に語る物語としてどのような物

語を獲得したのかという、ハルの主観的視点を明らかにする。

4-3 「私は病気である」という自己物語

分析3に従って、「私は病気である」という語り(以下、「病気」物語)を検討したところ、「病気」物語は、文脈1:対身体・対自分、文脈2:対他者、文脈3:対医療の3つの文脈で用いられていた。「病気」物語を通して自己や他者に対する意味づけは変化し、CO選択に影響を与えていた。本文中の①~⑩は「病気」物語テキストと対応している。

病気物語テキスト

《文脈1:対身体・対自分》

対身体に関して

①治すもの、治るものとしての身体

「病気だから治そうと思うし、治るから。」

②一生メンテナンスが必要な身体

「手術をしたとしても、男性ホルモン等々で、一生メンテナンスが必要なわけですよ。(中略)糖尿病とか心臓病とか、一生抱える、だけど死にはしないっていうものと同じように捉えていて。」

③抱えて生きていけるものとしての身体

「腎臓病だって、糖尿病だって、いろんな病気があるじゃん? エイズだって。でもそれをもって生きていく人はいるしさ。」

対自分に関して

④本来男であることへの医者からのお墨付き

「(診断されるまで)はやっぱり怖かったです。(中略)今の法律では医者が『違う』と言えば手術は受けられません。何か一言で自分の夢、というか将来像、というか、そういうものが全て壊れてしまうのかもしれない、と思えばやっぱり怖いし、医者の認定もないまま『ぼくは性同一性障害で、将来男になる予定です』なんて言えるほど強くありません。しかし、めでたく医者のお墨付きをもらった訳で、将来男になるか女になるのか、定まった、と言えなくもない。」

⑤「普通の人間」である証明

「自分はそういう病気を持っているから、それでこうなっているからさ。自分はいくまで普通の人間であって、普通の人間だから。」

間であって、普通の人間だから。」

⑥「マジョリティ」

「ゲイの人たちと違って実は我々はマジョリティなのです。だって異性愛者です。」

《文脈2:対他者》

⑦他者に選択肢を与える

「病気だって考えれば、人間関係も別に変じゃない。受け入れてくれる人とは別に友だちになれるし、(中略)エイズでもさ、触るのが嫌だって言って避ける人は避けるだろうし。それでも関係ないよって握手したりハグしたりする人はするでしょ?」

⑧病気なら受け入れてくれる

「正直、性同一性障害を受け入れてくれない人っていうのは、珍しいんじゃないかと思います。というのも、これは病気だから。」

⑨病気を持った者として認知して欲しい

「そういう病気があって、それは葛藤が生じるものだから、きちんと病気、障害として扱ってほしい。性同一性障害者として扱って。」

⑩治療に関する同意と費用の工面

「家族の同意がないと、治療の第2、第3段階といわれるホルモン投薬、性適合手術に進めないというのがわかっていたのと、おそらくは莫大になるであろう医療費を払える自信がない、という不埒な理由もあるわけです。」

《文脈3:対医療》

⑪医療保険の整備

「(病気なんだから)治療費出せとか思うけどね。保険きかせるとかいいね。」

⑫手術に至るまでの時間とお金の不満

「ぜひ早く手術をしてほしい、治療にかかる時間とお金ですね。400万くらい掛かりますから。もっと早く、安く、というふうにしてほしいと思います。」

文脈1:対身体・対自分

ハルは、自らの身体を①治すもの、治るものとして捉える一方で、糖尿病、腎臓病、エイズなど慢性病の例を出しながら、②一生メンテナンス(ホルモン投薬)が必要な身体と語る。それは慢性病ゆえに③抱え

て生きていけるものとしての身体であるという。

文脈 1 の対身体では、ハルなりのゴール地点（「胸がなくなって、ペニスがついたら区切りがつく」）が置かれ、将来男性体になる確信が強まっていた。そして、手術に向けてお金を貯蓄しはじめる。「手術」や「メンテナンス」という言葉を用いることで、ハルは自他に対し「病気を持った自分」を認識させているといえる。

対自分では、ハルは GID の診断を「本来は男だった」と信じて「男になりたい」自分が、医療という科学的文脈で認められたという意味で「医者のお墨付き」と肯定的に表現している (④)。医者の診断は、『私は GID である』という現在の自己物語を安定させるだけでなく、ハルが将来男として生きていくための治療のプロセスを示し、ハルの自己物語を医療の文脈から保証するものなのである。また、医者からのお墨付きは「普通の人間」であり「マジョリティ」であることの証明であった (⑤, ⑥)。なぜなら、診断によって本来男であることが認められた時点で、ハルは『同性愛者』ではなくなり、「異性愛者だから普通な自分」になることができたからである。

文脈 2：対他者

文脈 1 で、対身体、対自分への意味づけが変化したことで、文脈 2：対他者への意味づけに変化が生じていた。それは、主に対人関係におけるハルの心構えの変化である。ハルはエイズを例に出しながら、「病気」という肩書きを前面に出していくことで、他者に「自分と付き合い方かどうか」選択肢を与えているが (⑦)、その裏には⑧病気なら受け入れてくれる、という他者に対する心構えがある。なぜなら、男性のような髪形にしたり、洋服を着たりするのはいい加減な気持ちからではなく、「病気」に由来する葛藤の解消手段だからである (⑨)。

また、家族に CO することは、性別適合手術を行うのに必須である家族の治療同意を得るため、そして高額な治療費を工面するため（家族に金銭的援助を受ける）の手段になっている (⑩)。

文脈 3：対医療

対医療に関しては、治療費に関する不満が述べられ

る (⑪, ⑫)。性別適合手術には高額な治療費が必要な上に、生涯にわたりホルモン投薬を続けなければならない。経済的負担が大きいため、多くの GID 当事者が治療を受けられない状況もある (池田ら, 2003)。また、性別適合手術を受けるまでに時間がかかることにも不満を感じている (⑫)。

4-4 移行の物語の考察：COにおける物語循環生成プロセス

次に、「病気」物語を語りはじめたハルが、「病気」物語を利用しながら CO 選択に至るプロセス、およびハルが CO 選択を決意した後に、CO 選択をした自己をどのように意味づけ、語っているのかについて図 3 と CO テキストをもとに考察する。

図 3 は、「病気」物語の構造と、ハルが CO を選択するときの鍵概念である〈時間的展望・自己の時間的一貫性〉と〈他者との共生可能性〉との関連を示した図である。横軸は時間軸であり、3 つの文脈の面が重なりながらも徐々に発生してきたことを示している。縦軸は、対身体・対自分から対他者、そして対医療へと自己の内部から外界の他者、そして社会へとその社会的発信度を強めていることを示す。以下、CO テキストから具体的な検討を行う。

CO テキスト

《機能：時間的展望⇒他者との共生可能性》

【テキスト A】

「一生このままで（身体を変えないで）いいんだったら、言わなくても自分の心の中だけで思っただけでいいのかもしれないけど。（身体を変えた）あとからごたごたするのが嫌だったっていうのはあるかな？どうせいつか出てくる問題なら、ねえ、先に出しとこう。」

「それ (GID) が分かった時点で、5 年後に（手術をして男性に）変わるくらいの勢いが、結構あっさり決まったからそうしたら自分の中で、5 年後に（友人と）別れるかもしれないって思いながら付き合っているのは嫌だった。」

《機能：自己の時間的一貫性》

【テキストB】

「過去を隠そうとか、女であったことを一切分からんようにしようとかいう発想はない。」

「女の身体を持っていたってことはすごく面白いっていうか、重要なカテゴリ」

《相互に循環》

【テキストD】

「将来、身体的には変化しても、自分の中で発想的に何か変わるわけではない。」「カミングアウトしても（他者との関係が）前と何も変わらないのが楽。」

《機能：他者との共生可能性》

【テキストC】

「今まで自分は女として育てられて、それに違和感を持って。男性の身体になるとしても、今までのは全部あるわけじゃん。人間関係もそうだし、その中で悩んで、こういう発想になるのもそうだし、それはやっぱり女の身体であったからこそ得た状況であって、発想であって、性格なわけだと思っ。」

「仲間と一緒にだからできたとか楽しいとか、そういうことを人との関係を絶って、自分のことだけしか考えないで生きていくのでは、やっぱり楽しくない気がするんです。」

「隠し事をしているような気にもなる。仲良くなりきれていない感情。」

《機能：現在に対する強い肯定

（仮定法語り「もし、男に生まれていたら〜」）

【テキストE】

「すっげー男尊女卑男になっているのかなとか」

「生理痛の辛さも知らないで、（女性に対して）なんやこれとか言って怒ってんのかな」「普通に学校通ってそう。」

《機能：自己に対する強い信念》

【テキストF】

「女であったときの自分をなかつたことのように

して、男として第2の人生を生きる。女であるときの自分は、仮の姿だから、息をひそめて生きていて男になってスパークする。そういう考え方もあるのかもしれませんが、私は好きじゃなかった。」

「単に人と摩擦が起きないとかじゃなくて、自分であることが楽。」

テキストAでは、将来男性体になることが革新的になったことで、未来への時間的展望が生成され、今後の他者との関係性が考慮されはじめていることが分かる。ハルの今後の対人関係は、「COせず他者と完全に別離して生きるか」「拒絶されるかもしれないが、COして受け入れてもらう可能性に賭けるか」の二者択一であり、CO選択における大きな岐路になっている。

しかし、性別適合手術前に行われるホルモン投薬治療では、ハルの身体に著しい変化が起きることが容易に予測される。体型は男らしくなり、ひげが生え、声は低くなる。つまり、GIDであることが必然的に露呈してしまうのである。ハルの今後の対人関係の持ち方やCO選択問題は、身体変化によるGID露見性と密接に絡み合っているといえる。

テキストBでは、「過去、女で生きてきた自分」「今、女である自分」が「病氣」物語によって肯定的に意味づけられていた。女性である（だった）過去を隠すことは、20年間生きてきたハルの存在を否定することになり、過去から現在までのハルと、将来男性になろうとする未来のハルを別の存在として分断してしまう。「病氣」物語は、ハルを過去—現在—未来と時間的に連続性のある存在とするための潤滑油になっていた。

つづいてテキストCでは、自分が女性であったからこそ得られた仲間と楽しい出来事を経験したことで、豊かな自分が作り上げられてきたと物語る。今後の対人関係を今までのように維持していくことは、それまでのハル自身を保つことでもある（性格や発想において）。COしないことは、他者に対する隠し事として否定的に捉えられているが、それは『同性愛者』時代のように再び他者との間に溝をつくってしまうからである。

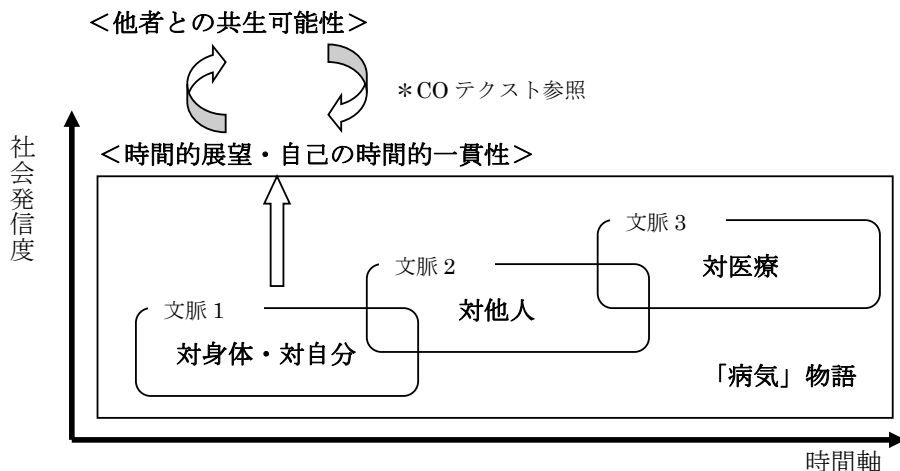


図3 「病気」物語の構造とCOにおける物語循環生成プロセス

テキスト D は、自己の時間的一貫性と他者との共生可能性の相互循環を示している。CO し、対人関係を維持することによって、ハルの自己物語は時間軸上で一貫し連続性のあるものになるが（テキスト C）、それは結果的にハルに対する他者の疑惑・不信感（「身体を変えたら、人格も変化するのではないか」）を拭いさり、安定した対人関係を継続させるのである。

テキスト E は、「もし、男に生まれていたら～」という仮定法の語りである。いずれの仮定の結果に対しても否定的評価をすることで、女性である現在の自分、および女性として生きてきた事実をより肯定的に捉える物語として機能している。「普通に学校通ってそう」という語りには、「不登校をしたからこそ、今の私がいる」という現在のハルに対する強い肯定的メッセージが含まれている。

テキスト A～テキスト E では、CO 選択をめぐって物語が相互に循環し、生成され続けていくプロセスが見て取れる。つまり、CO 選択に至る中で、ハルはCO しようとする自己についての意味づけも変えていく。さらにその意味づけの変化は、ハルがCO 選択する道を開いていく。そして、CO 選択に開かれた道の中で、ハルはCO を選択しようとする自己の語りを生成していく。

しかし、一方で「(自分のことを) 気持ち悪いもの

として(他者から)排除されるのは嫌だな」という語りもあり、CO に対する恐怖や揺らぎがみられる。

「病気」物語は、他者から逆に排除され隔離される可能性をも有している。したがって、ハルにとって「心と体の性が一致して生まれてくれば、それが一番ベストだと思うし。そんな病気は起こらないほうがいい」ことに変わりない。それでもハルがCO を選んだのは、テキスト Fにあるような「自分が楽に生きることが一番大事」という強い信念が影響しているように思われる。GID と診断されて2 ヶ月後、ハルはCO しはじめる。

5 結果と考察3 ポストCO期

5-1 CO後の自己物語

ハルにとって、ポストCO 期を語る意義は何であろうか？ ハルは、ポストCO 期を「必然的に女でありながら男の心を持ち、それを周囲と共感しながら生きていかなければならない時間」と語る。ハルは、ポストCO 期で、周囲の人たちに受け容れてもらい、共に生きていくことを必要条件として目指している。

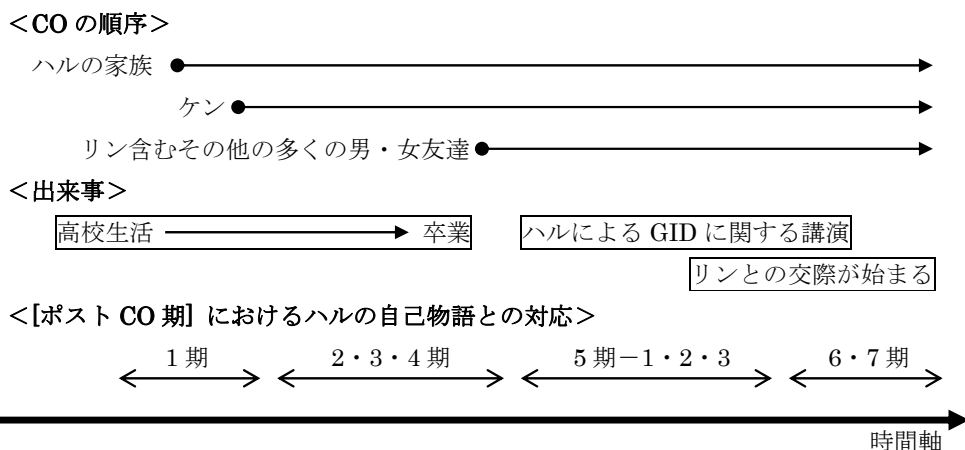


図4 カミングアウト時の状況とポストCO期のハルの自己物語との対応

ハルはCOについて「ちょっと不安はありつつも、べらべらとしゃべっている」という。金八先生というドラマ（ドラマの中でGID役が登場し、COする）については「打ち明ける方も、打ち明けられる方も、だいぶ肩に力が入っている。少し重く捉えすぎじゃないかなあ」と語り、「本当の問題は、打ち明けた後だと思う」という。ハルがメディアに流れるCOに違和感を持つのは、CO後の当事者と他者の関係について触れられていないためである。4-2で述べたように「プロセスとしてCOを捉えること」は、COの行為だけでなく、CO後の他者との関係も含まれている。

図4をみれば分かるように、ポストCO期のハルの状況は、プレCO期とは異なり、他者の反応や環境的要因を重層的に受けるようになる。

ポストCO期における重要な他者とは、ケン（男友達）と、リン（ハルと恋人関係にある女性）の2名である。ケン、リンともに仮名である。分析2の結果、ハルの自己物語は1期から7期に分けられた。

1期：「男」としての自分を受け入れてもらった

男が「」で括られているのは、現時点では身体的に女性であることと、ハルの中で「男」の意味が明確にされていないためである。ハルが最初にCOしたのは、男友達のケンであった。ハルがCOした後、ケン

はハルに「女の人が好きなの？」「エロ本読むの？」「男の人に体触られたりすると気持ち悪いの？」とハルの性指向に関して質問する。ケンは、ハルが自分と同じ性指向（異性愛）を持つことを知って納得し、自分に彼女がいてもハルと2人きりで夜中に遊ぶ関係へと変化していく。1期のハルはケンの行動変化を「完全には言いませんが、ほぼ男性として扱ってくれる」ものとして、ポジティブに語っている。

ハルは「上手くやれそうな感じがして」、他の人にもCOしていく。「気持ち悪いものとして排除される」ことを恐れていたハルにとって、ケンと関係が持続したことは、今後もCOしていくことに自信を与えると同時に、COを選択した自分自身の物語も強化していると思われる。他の友人から、「身体変える必要はない」「理解できないっていうのに近い」と言われても、ハルは自分が拒絶されたとは受け止めていない。理解されなくとも排除されなかったこと自体が重要だったのであり、「COしてしばらくの間は幸せな期間を過ごせます」と語っている。

2期：「女」扱われる「男」のハル

2期で、ハルは他者から「女」扱われることに苛立ちや葛藤を抱える。それらは①高校での授業・行事、②女友達との関係、③ケンとの関係の3つの文脈で語

られ、特に②を強調して語った。

①高校での授業・行事の場面

教師に CO した後も、学校の授業や行事の中で、ハルは今までどおり「女」として扱われる。「水泳の授業を免れたわけでもなく、体育着への着替えも他の女子と同じ、課題も女子と一緒にだし、選択科目も女子に分けられ」、「修学旅行も参加しましたが、女子と同じ部屋ですし、風呂も一緒」であることは、ハルに女扱いされる屈辱を感じさせていた。

②女友達との関係

ハルは「バリア」という言葉を用いて、女友達との関係性を表現する。「バリア」とは、女性側が男性に対して示す抵抗感や距離感を示す。ハルは、女友達が自分に気安く話しかけてきたり、よくご飯を食べに誘ってきたりする経験から「(女性は)自分にはバリアを張っていない」という。つまり、自分に対して女性が見せる「敷居の低さ」は、「男」としてみなされていない証拠なのである。また、好きになった女性から「女として扱われると、さすがにへこみ」、「完全な男扱い」をされていないと感じていた。

③ケンとの関係

ハルはそれまで、ケンとの関係では自分が「男」とみなされ、「男」同士の付き合いができていたと思っていた(1期)。しかし、「(ケン)が女の中では一番男っぽい自分と男友達になったけど、いざ(他の)男の友達ができれば、ポンとそっちにいつてしまうってことは、完全な男性扱いされていないから、男友達にはなれなかった」と嘆く。

3期：どちらの性にも属せない「男」のハル

「男性からは、所詮女だと思われ、また一部の女性からは女なんだけど、ちょっと違う、どちらにも属せない、そういう存在のような気がして」いたハルは、「できれば自分も恋人が欲しいと思ったり、友人たちから男として扱われたい」と思っていた。しかし、「男の子と一緒に風呂に入るわけにもいかず、かといって女の子と入ることは、CO してしまったあとには、まるでのぞきをしているようなやるせなさ」を感じ、

「本当の意味での友達っていうのが、ありえない」と思い、「孤独だった」という。そして、「本当に面倒くさくなって、体が変わるまで、誰とも深く付き合わず、一人でひっそり生きていく、もしくは、初めから自分を性同一性障害者として受け止めてくれる場……新宿二丁目⁴⁾などにある同性愛の人の社交場みたいな」場所に行くことも考えるようになる。

経緯は不明であるが、ハルはゲイの人たちと交流があった。ハルは彼らを「一般的常識にはいない人たち」と呼び、それと対応させて自分自身を「いきなりぼんと違うものが生まれた」と表現する。ハルは、自分たちをマジョリティには属せない者同士として親和性を感じており、ゲイの人たちは「自分を受け入れてくれる」と語った。

4期：「男」「女」にこだわっていた自分の発見

日頃、ケンから「女の子と遊ぶな(=気軽に異性と戯れるな)、立ち振る舞いに気をつける(=女らしい振る舞いをするな)、喋り方に気をつける(=女が使うような言葉を使うな)」と言われていたハルは、それを「男」になるための助言と捉え、従っていた。しかし、ハルはその助言に疑問を抱くようになり、ついには「ジェンダーの縛り」にしかみえなくなっていく。ハルはケンからの扱いに疑問を抱く中で、自分が「男」「男扱い」「女」「女扱い」という分類にこだわっていたことを発見する。

5期：「男扱い」にこだわらないハル

5期は、さらに5期-1・2・3の3つの過程に分けられた。それぞれの段階を経て、「扱いにこだわらない」という自己物語が強化されていた。

5期-1では、ハルの中で「男」という概念の意味づけが、「男になるのだから男扱いされたい」というものから「単に男性体を獲得するだけで扱いは関係ない」と転換する。ハルにとって「男」になることは「ただこの胸がおかしい、ペニスがないのがおかしいっていうそれだけのことだから、(中略)男性体になりたいだけ」のことなのである。そして「(その方が)相手の人たちも、もっと自然に受け入れられるんじゃないかな」と語る。その一方で、「(他のGID当事者の人たちで)男に一生懸命になろうとか、女に一

生懸命になろうっていう気持ちはね、分からんでもない」とアンビバレントな気持ちを語っている。

5期-2では、女友達であったリンと恋愛関係が始まったこと、がハルの自己物語に大きく影響を与えていた。それまでハルは、他者から外見的に「男」に見えるように、胸にさらしを巻いて女性体を隠し、男性の服装・髪型をしていた。なぜなら、「男扱い」されるには「男に見える」ことが前提条件だからである。しかし、「それ（GID）でも恋人ができるんだ！」という予想外の出来事に、「男に見えなければならない」「男として扱われなければならない」としてハルを縛り付けていた物語は弱まっていく。それに伴い、行動レベルでも変化が起きている。「公園に行ったらさ、迷子の子に話し掛けられてさ、『お兄ちゃんなの？お姉ちゃんなの？』って聞かれたから、『どっちだと思っ？』って言ったら、『お兄ちゃん』っていうから『じゃあ、それでいいよ』って」というエピソードをハルは意気揚々と語り、この変化をポジティブに捉えている。

5期-3では、「私は男教育を受けていない」という語りがなされ、「女扱いしかされない」ことの正当な理由として機能していた。ハルには、一般の男性が女性に対して必要以上に気を使っているようにみえていた（例えば、ご飯に誘う時）。そこでハルは、「男教育」「男性オーラ」というものを仮定し、それによって男性は女性に対して気を使わなければならないと考えた。「男教育」「男性オーラ」は人生の中で形作られていくものであり、ハルのように20歳を過ぎてから「男」になったのでは「教育を一切受けてないから」持つことができないと物語る。2期のハルは、女性が一方的に「バリア」を作り出すと捉えているが、5期-3で発見した「男教育」「男性オーラ」物語では、「バリア」は逆に男性が作り出すものとなり、「男側が（「バリア」を）張っていれば女の子側も張らざるを得なくなる」という論理が作られている。その論理を用いて「女扱いされない」理由を「僕（ハル）が全然バリアをしてないから、向こう（女性）も（バリアを）してないのかもしれない」と解釈している。「男教育」「男性オーラ」物語は、それまでの「女扱いされない」物語を転換し、女友達との間で生じていた葛藤を解消している。

5期-1・2・3を経て、ハルはそれまで胸の膨らみを隠すために巻いていたさらしをとっている。「男として見られなければならない」「男として扱われなければならない」という物語が弱まったことと、リンとの交際で「（女性体であることが）男扱い、女扱いに直結するものではない」と考えるようになり、さらしをとる行為にでたのである。

6期：GID 当事者として生きる／他者からのまなざしへの不安

ハルは6期を「微妙な段階」と表現する。「男扱い」「女扱い」を望まない存在という意味で、GID 当事者として生きることを決めた時期である。「微妙」という言葉には、ハルの不安が表れている。ハルが『GID である』ことを知っている他者に対しては「自分は性同一性障害の人だから、そういうふうにして生きよう」と認識が変化しているが、ハルが『GID である』ことを知らない「街歩いているときの一般通行人」に対しては、「何かを突っ込まれたらやだなっていうときどき」を感じてしまうのである。「一般通行人」がハルに浴びせる「何だ、この人（ハル）は？」的まなざしはハルの不安を助長する。「一般通行人」は、ハルの外見から性別を判断しがたいために違和感を持ってしまう。だからこそ、それまでハルは「男」に見えるようにできるだけ努力してきたのである。

他者の疑いのまなざしが最も表面化するのは、公共のトイレの場面である。ハルは、時々男子トイレを使用するが、そのときの他者（男性）からの視線は「女性が男子トイレに入ってきた」という疑惑のまなざしである。女子トイレに入れば、女性から「男性なのではないか？」という疑惑のまなざしを受ける。『GID である』ことを「看板を掲げながら」、「しゃべりながら入るわけにいかない」ので、「一般通行人」と『GID』物語を共有することは不可能である。ハルには「変な目で見られてもいいだろうと思ってトイレに入る心」「そうはいつでも見られたときにどきどきしてしまう心」という2つの相反した感情が湧き起こってしまう。

ハルは、自分が『GID である』ことを知っている人たちには特に不安を感じないというが、「知り合いばっかの男の子たちのグループでどっか行ったりする時

はさすがに嫌だから」女子トイレに入るといふ。「相手（男友達）が嫌だろう」と配慮するからである。

しかし、トイレは他者との問題にとどまらない。ハルにとっては「自分が座っておしっこしてるのとかも変」に感じられ、自らの女性体と向かい合わねばならない時間であり、大きなストレスとなっている。よって、日常生活では男女共用トイレの場所の確認をし、多少の時間だったらトイレを我慢するという。このように、公共トイレは、他者からのまなざしや湧き上がる不安、また自己の違和感が最大になる苦痛の場面であるといえる。

7期：GIDとして扱ってほしい／状況によって、気分は変化する

「男」「女」という分類で考えると、どちらにも所属できない存在として自分を位置づけるハルは、7期で「GIDという病気を持った人として扱ってほしい」と他者に要望する。「興味本位で男性になりたい、ペニスをつけてみたい」のではないということを重要な他者に理解してもらい、そのうえで、「男」「女」が明確に分けられる公共の場（トイレやホテルの宿泊）では、GIDとしての自分の扱い方を直接聞いてほしいと要望する。「本人がどうしたいかをさ、聞かないで、他が勝手にやるっていうのは不可能」と考え、GIDでない非当事者たちに自分の宿泊部屋、風呂分けを決め付けられるのは腹が立つという。

そのように語る一方、GIDはあくまで単なる病気であって、生活の中では自分も1人の人間であって、状況によって気分が変わるということも理解してほしいという。「絶対女の人となんで嫌だから分けてほしいって思うときと、別にどうでもいーやとか思うときといろいろあるから」である。1人の人間として、状況によって揺れるGID当事者のハルとそうでない（非当事者）他者との溝を埋めるためには「当事者と当事者以外の両者ができる範囲で納得のいく道を探していくということがベストである」とし、対話の重要性を訴えている。

5-2 ポストCO期の考察：ポストCO期の2次元構造

考察では、次元1：男一女、次元2：GID当事者－非当事者という2つの次元から、ポストCO期におけるハルと他者の関係性を検討する。

次元1において、ハルは「男」「男扱い」にこだわり、それが満たされないという葛藤を抱えていた。1期では、ハルはケンから「男」とみなされたと思っており、葛藤は生じていない。2期、3期のハルは、「男」として見られ「男扱い」されることを望んでいるにもかかわらず、他者からは「女」として見られ「女扱い」されてしまう。ハルは「男」にも「女」にも所属できないため、次元1に自己を付置できず、孤独を感じている。そして、自らを次元2であるGID当事者の位置に置くことで、同じセクシュアルマイノリティであるゲイの人たちに親和感情を持つようになる。しかし、次元2に自分を付置するのは、自分の所属場所（自己物語）を確保するためであって、当事者以外の他者との関係性は閉じている。

4期では、今まで次元1での所属場所にこだわっていた（「男」「女」にこだわっていた）自分を発見する。さらに、5期では、「男として見られなければならない」「男として扱われなければならない」というそれまでの物語が弱まっていく。次元1にこだわらなくても恋人ができたことで、次元1にとどまることの意味が消失していくのである。

そこで、ハルは「GID当事者として生きよう」と物語転換しているが（以下、GID物語）、それは次元2への移行を示している。これは、「GID」をもった自分を前面に出して語る姿勢であり、結果と考察2の「病気」物語に類似している。その姿勢には、他者と共に生きようとするハルの意志がみられる。しかし、ハルが次元2でGID当事者として他者と共に生きようと語るとき、ハル（GID当事者）に対置される他者は、GID非当事者という存在としての他者である。また、GID物語は、ハルがGIDであることを知っている他者に対しては有効であるが、ハルがGIDであることを知らない「一般通行人」のような他者には無効である。つまり、「一般通行人」は、ハルを次元2の

GID 当事者としては、認知できない。ゆえに、「一般通行人」は次元1の性別で判断できないハルに違和感を持ち、疑いのまなざしを向けてしまうのである。

このような状況を考慮すると、5期を経てハルが胸のさらしをとったのは、大きな変化といえるだろう。胸のさらしをとれば、当然胸が出ていることが他者の目に明らかになる。女性の身体つきと男性のような髪型・服装という組み合わせは、他者の疑いを増大させる。だからこそ、それまでハルは胸にさらしを巻き、次元1で「男」に見られる努力をしていたのである。しかし、自らを次元2に付置するようになると、「男」に見られる必要がなくなり、女性の身体つきを気にしなくなっていく。そもそも、身体に強い違和感を持っているハル自身にとっても、胸が出ていることは苦痛そのものである。それでも、ハルは「GID 当事者」として生きていくなかで、それすら許容していくようになる。性転換願望は抱えたままで、である。

4期から7期へと経過するにつれ、次元2のGID物語が、日常の対人関係といったローカルな文脈において、具体性を持って語られるようになっていく。それに伴い、ハルは次元1へのこだわりを現実の生活の中で消化していき、ハル自身が他者と共に「楽に生きる道」を探していく。このとき、GID物語は他者と共に生きていくためのひとつの足がかりとなり、自他の間に関係の結び目をつくっているといえよう。

しかし、GID 当事者-非当事者間で揺れ動くハルの姿も垣間見られる。私はGIDという「病気」を持っているGID 当事者だけれど、当事者である前に1人の人間であって「病気」を持ってはいない(GID 非当事者)であるという2つの物語のせめぎあいである。先に述べた関係の結び目は、自分と他者をつなぐ土台となるが、ただ結び目が「ある」だけでは意味がない。日常のローカルな関係性の網の中で、いかにその結び目を結び、柔軟に何重にも結び直し続けていけるかどうかが重要である。物語は始まったばかりである。今後、他者とうまく疎通がとれなくなることもあるだろう。それでもハルは他者と対話をつづけ、関係を結びなおし続けていくことに共生の希望を抱いているのである。

6 総括的討論

本稿では、GID 当事者一事例を対象とし、自己物語の視点から質的な分析を行った。個人の主観、意味、解釈を重視する立場に立って語りを聴きつづけることで、当事者がいくつもの自己物語を彷徨しながら、GID 認知し GID 当事者となっていく生き様が見られた。それは、単に「性を変える」という一言でおさまるものではなく、個人の人生に深く埋め込まれたプロセスである。性別適合手術を行った後に、自らのボディイメージが崩れ、自殺を図る人も少なくないという話があるが⁵⁾、このような不幸な事例を防ぐためにも当事者一人一人にとっての「GID 当事者である」経験を聴き取る必要性があるのではないだろうか。

また、ある個人がある人生の中で「性を変える」というプロセスは、他者、そして社会をも巻き込んでいくものである。社会とは、歴史や文化を内包する概念であるが、GID を含めセクシュアルマイノリティの存在は、歴史上排除されてきた存在であり、現在もその歴史を負っている。そのような社会の中で「性を変えた(変えようとする)」自己を他者にさらけ出すCO それ自体も、「性を変える」プロセスの一環といえる。ハルの物語は、他者を志向し、そのつど語り直しを求めることで、ハルを形作っていく。ハルの物語は、まさに生/性の軌跡である。

ハルは「性を変える」プロセスのなかで「病気である」ことを繰り返し語ったが、そこには病い(Kleinman, 1988/1996)の意味合いをもったGIDが構築されていた。クライマン(1988/1996)は、病いの4つの意味を区別しているが(「1 問題」を参照)、ハルの物語もそれに従って4つに分けることができる。第1の意味は「症状自体の表面的な意味」である。これは、GID の臨床症状であり、ハルの身体違和感や幼少期からの性転換願望を指す。第2の意味は、「文化的に際立った特徴を持つ意味」である。先述したセクシュアルマイノリティの歴史に値する。第3の意味は、「個人的経験に基づく意味」である。本稿では、第3の意味を主に扱った。つまり、病いは、単なる生物学的な出来事ではなく、生まれてから現在までの人生に起きた様々な出来事と結び合わされて、その人にとつ

ての意味を持ち、存在するのである。出来事それ自体が、物語によって立ちあらわれるといった相互作用もある。第4の意味は、「病いを説明しようとして生ずる意味」である。これは、病者本人をはじめ家族や治療者が、原因・発症理由・今後の予測などの疑問に納得いく説明を与えるなかで構成されていく意味である。第4の意味については、ハルは物語化しておらず、むしろハルからCOされた他者が物語を構成していく傾向がみられた。本稿では紙幅の関係で扱えなかったが、ハルの母親からは、第4の意味を模索する語りが多く見られた。GID当事者を抱える家族のケースをみると、家族の中でGID当事者の存在は受容されにくく、親に勘当されることも少なくないようである（自助グループでの当事者談）。家族からの拒絶は、当事者にとって大きなストレスになることは想像に難くない。しかし、家族成員にとっても、家族の誰かが「性を変える」ことは大きな出来事であり、ショックを受けると思われる。よって、それに関しては今後の展望としたい。

母親に限らず、またハルと関係を持つ他者（筆者を含む）も同様に第4の意味を模索しようとしている。結果として当事者に差別的なまなざしを向けたりすることもあつた（当事者が他者からのまなざしに敏感であることも否めない）。例えば、他者がハルを見て感じる違和感や、ハルとケンのやりとりをみると、我々がいかに男一女（次元1）で他者を判断し、男扱い・女扱いといった概念に支配されているのかに気付かされる。ハルにとっては「ジェンダーの縛り」でしかなかったケンの発言も、ハルの今後を思って、「男」としてこの社会で生きていくための作法を教えたのかもしれない。同じ「同性」になったからには「男友達」として教えてやらなければならない責任を感じたのかもしれないのである。

社会から差別をなくすことは簡単にはできないが、ハルがしているように他者との関係のあり方を具体的に考え、他者と対話し、生きなおす努力のうえにしか差別の克服はないと思われる（浜田，1999）。

最後に、本稿のようにインタビューを用いた一事例による縦断研究をする場合の研究者自身の立ち位置について考察を行う。研究者の立ち位置は「自己物語の主体は誰か」という問い（「1 問題」を参照）に密接

に関連し、物語論の課題を考える上で重要なテーマであろう。

筆者は、研究の中でGID当事者のハルというよりは、当事者の枠を越えた一個人のハルと向き合うようになっていった。また、筆者自身も研究者というよりも、ハルに向き合う一個人に還っていく場面もあった。この場合、研究者は“証人”（Herman, 1992/1999）としての立ち位置で「研究の場」に挑んでいるといえる。ハーマン（1992/1999）は、心的外傷の体系的・組織的な研究において、被害者を肯定し受容し保護し、被害者と“証人”とを連帯させるような社会の流れが必要であるという。質的研究は、発言をしたとしても周辺に追いやられたり放置されがちなマイノリティの人々に「声を与える」ことを目的にする場合もある（Willig, 2001）。

研究者が研究対象の“証人”として対象者の傍らに寄り添い、連帯していくとき、研究者は対象者との関係の外部に決してとどまれないことを認めなければならない。当事者及び研究者が行う意味の構成には、双方向的な意味構成の相互循環が起きている。議論の余地は残ると思われるが、研究者がこのような対象者との相互循環関係を自覚し、反省を行いつつ、語り手との間で共同作業的に「ことば」として擦り合わせ描き出していくことは、マイノリティ研究において意義あるものになるのではないだろうか。

今後、本研究の仮説を継承させていくことを課題とし、ハルおよびハルをとりまく他者を縦断的に追い、より一層当事者理解を深めつつ、質的研究の在り方についても考えていきたい。

注

- 1) 一般には「性転換手術」として知られているが、当事者にとっては性別を転換（変更）する手術ではなく、誤った身体を修正し本来の性別を獲得するために必要な手術と考えられるため、「性別適合手術」という表現が用いられる。手術では、外性器、内性器の変更だけでなく、乳房の切除（あるいは乳房形成術）や喉仏などの性別特徴の存在する部分の変更なども含まれる。
- 2) 特例法は（1）2人以上の医師が性同一性障害と診断し、（2）20歳以上、（3）結婚していない、（4）子供

がない、(5) 生殖機能を失っている——などの条件を満たしている場合、家裁が認めれば戸籍の性別を変更できる。

- 3) CO を望まないという生きかたもあり、どちらがよいかといった価値観の問題ではない。
- 4) 東京・新宿二丁目の仲通周辺にゲイやレズビアンが集まるバーがたくさんあることから、遊び場として総称される。
- 5) 2003年3月に東京で行われた第5回GID研究会での講演に拠る。

引用文献

- Anderson, H., & Goolishian, H.A. (1992). The client is the Expert. In McNamees, S., & Gergen, K.J. (Eds.) *Therapy as Social Construction* (pp.25-38). London: Sage.
- Bruner, J.S. (1999). 意味の復権：フォークサイコロジーに向けて（岡本夏木・仲渡一美・吉村啓子，訳）. 京都：ミネルヴァ書房。（Bruner, J.S. (1990). *Acts of Meaning*. Cambridge: Harvard University Press.）
- Chaloner, J. (1991). The voice of the transsexual. In Fawcus, M. (Ed.) *Voice Disorders and their Management*. (pp.314-332). London: Chapman and Hall.
- Devor, H. (1994). Transsexualism, dissociation, and child abuse: An initial discussion based on nonclinical data. *Journal of Psychology and Human Sexuality*, 6, 49-72.
- Frank, A.W. (2002). 傷ついた物語の語り手：身体・病い・倫理（鈴木智之，訳）. 東京：ゆみる出版。（Frank, A.W. (1995). *The Wounded Storyteller: Body, Illness, and Ethics*. Chicago: The University of Chicago Press.）
- Gergen, K.J., & Gergen, M.M. (1983). Narrative of the Self. In Sarbin, T.R., and Scheibe, K.E. (Eds.) *Studies in Social Identity*. (pp.254-273). New York: Praeger.
- Gergen, K.J. (1994). *Self-Narration in Social Life. Realities and Relationships*, (pp.185-209). Harvard University Express.
- Goffman, E. (1970). ステイグマの社会学：烙印を押されたアイデンティティ（石黒毅，訳）. 東京：せりか書房。（Goffman, E. (1963). *Stigma: Notes on the Management of Spoiled Identity*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.）
- 浜田寿美男. (1999). 「私」とは何か：ことばと身体の出会い. 東京：講談社.
- 針間克己. (2003). 性同一性障害の現状と特例法. 日本医師会雑誌, 130 (5), 754-758.
- 平安名祐生・平安名恵. (2000). Search～きみがいた：GID（性同一性障害）ふたりの結婚. 東京：徳間書店.
- Herman, J.L. (1999). 心的外傷と回復（中井久夫，訳）. 東京：みすず書房. (Herman, J.L. (1992). *Trauma and Recovery*. New York: Basic Books.）
- Hunt, D.D., & Hampson, J.L. (1980). Follow-up of 17 biologic male transsexuals after sex reassignment surgery. *American Journal of Psychiatry*, 137, 432-438.
- 池田久美子・岡部芳広・木村一紀・黒岩龍太郎・高取昌二・土肥いつき・宮崎留美子. (2003). セクシュアルマイノリティ：同性愛，性同一性障害，インターセックスの当事者が語る人間の多様な性. 東京：明石書店.
- 石川准. (1996). アイデンティティの政治学. 井上俊ほか（編），岩波講座現代社会学 15，差別と共生の社会学. 東京：岩波書店.
- Jones, B. and Hill, M. (2002). Mental health issues in lesbian, gay, bisexual, and transgender communities. *Annual Review of Psychology*, 21, 15-31.
- 貴邑富久子. (2003, 7月). 性同一性障害，同性愛は胎児期に決まる？ 脳の性差研究の最前線. セクシャル・サイエンス. <http://www.medical-tribune.co.jp/ss/2003-9/ss0309-2.htm> (情報取得 2005/11/02)
- Kleinman, A. (1996). 病いの語り：慢性の病いをめぐる臨床人類学.（江口重幸・五木田紳・上野豪志，訳）. 東京：誠信書房. (Kleinman, A. (1988). *The Illness Narratives: Suffering, Healing and the Human condition*. New York: Basic Books.）
- 野口裕二. (2002). 物語としてのケア. 東京：医学書院.
- 大島俊之. (2001a). 性同一性障害と戸籍訂正. 法律時報, 73 (3), 114-117.
- 大島俊之. (2001b). 拘置所・刑務所における性同一性障害者の処遇. ジュリスト, 1212, 73-79.
- 大島俊之. (2002). 性同一性障害と法. 東京：日本評論社.
- Pauly, F. (1993). Gender identity disorders: Evaluation and treatment. *Journal of Sex Education Therapy*, 16, 2-24.
- Plummer, K. (1998). セクシュアルストーリーの時代：語りのポリティクス（桜井厚・好井裕明・小林多寿子，訳）. 東京：新曜社. (Plummer, K. (1995). *Telling Sexual Stories : Power, Change and Social Worlds*. London: Routledge.）
- 西條剛央. (2003). 「構造構成的質的心理学」の構築. 質的心理学研究, 2, 164-186.
- 桜井厚. (2002). インタビューの社会学：ライフストーリーの聞き方. 東京：せりか書房.
- 瀬山紀子. (1998). 〈語り〉と〈コミュニティ〉の生成

——障害を持つ人々の語りを通して．お茶の水女子
大学人間文化研究科修士論文．

杉浦郁子．(2001)．「性の自己認知 *gender identity*」の社会的構築：「性同一性障害」をめぐる医学的言説において．中央大学文学部紀要，188，89-111．

やまだようこ．(1997)．モデル構成をめざす現場心理学の方法論．やまだようこ（編），現場心理学の発想（pp.161-186）．東京：新曜社．

湧井幸子．(2002)．不登校児における自己の解体と再編成．2002年度中央大学文学部卒業論文（未公刊）．

Willig, C. (2001). *Introducing Qualitative Research In Psychology: Adventures in Theory and Method*. Philadelphia: Open University Press.

付 記

本稿は，立命館大学応用人間科学研究科での修士論文に加筆修正を行ったものです。調査にご協力くださったハルさん，ハルのお母さん，ハルのパートナーであるリンさん，自助グループで出会ったみなさまには心より感謝申し上げます。

(2004.5.28 受稿，2005.5.3 受理)